医業経営の現場から

file109　中国・四国地区

訪問診療と訪問看護の二本柱で患者の尊厳を大切に

神経難病の受け皿に

馬木良文院長が、神経難病患者を支える在宅診療所を開業したのは2010年。「神経難病を専門とする病院に勤務していました。神経難病患者でも家に帰りたいという患者さんが多く、退院を計画するのですが、最終的にできないことが多かったのです。都会であれば在宅医療の受け皿がありますが、地方では特殊な病院に限られる。その状況を知る中で、私が地域の中で在宅医療を担えばと考えるようになりました」と開業を決断した理由を話す。

開業にあたっては訪問看護ステーションを併設し、管理者には勤務医時代から連携していた地域の訪問看護師でケアマネジャーをしていた吉野牧子氏を採用した。

「在宅医療は一緒に取り組むスタッフが非常に大事です。特に神経難病や高齢者医療、末期がんはチーム医療なので、私が思っていることを形にできるスタッフがいなければうまくいきません。神経難病に限っていえば、訪問看護の技術が高くてきちんとマネジメントできていれば、急に呼ばれることはほとんどありません。訪問看護師がいるからこそ遠方の患者であっても診ることができています」と馬木院長は、訪問診療と訪問看護の二本柱のケアの強みを話す。

ただ、「神経難病で在宅を始めたのですが、蓋を開けるとがん患者さんが多かった」という予想外の状況も。特にコロナ禍の間は、病院から家に帰るがん患者が増え、2021年頃から看取りが急増、それまで年間30人前後だったのが80人になったという。

「食べる」をどう考えるか

診療・看護では、「患者の尊厳を最も大切に」を理念とする。馬木院長は、「尊厳」とは人として大切にされること、自分の意思が尊重されること、そして苦痛がないことだとする。たとえば、「食べられなくなったら」について次のように話す。

「食べることをどう考えるかです。食卓に座って普通のものを食べることだけが『食べる』という行為で、それ以外は認めていない雰囲気がありますが、そこがまず1つ問題だと思うのです。食べることは楽しみとして、とても重要ですがそれ

医療法人はれの日 あおいそら在宅診療所 概要

■所在地　徳島県吉野川市鴨島町知恵島720-7

■理事長・院長　馬木　良文

■診療科　内科、神経内科

■関連施設　あおぞら内科訪問看護ステーション、あおぞら内科居宅介護支援センター、ナーシングホームあおいそら

「治療方針はそれぞれあると思いますが、患者さん自身が何を一番に考えているかが重要です」と馬木院長。希望するケアが叶うからこそ、「栄養が摂れなくなった患者さん自ら、口からチューブを入れて栄養を補給することも経験しました」という驚くべきエピソードも

ナーシングホームあおいそら：誰でも利用することができる児童発達支援・放課後等デイサービス・生活介護を併設した療養通所介護施設

あおぞら内科訪問看護ステーション所長の吉野牧子氏（在宅ケア認定看護師）

だけではないはずです。医療がまだ進んでいなかった頃は、75歳頃から体重が減り始めて、80歳になると内臓が弱り、嚥下障害になるよりも先に寿命が来ていました。しかし今は、嚥下障害があっても話したり歩いたりできる方はたくさんいます。

栄養が十分でも臓器の機能が低下して老衰になります。一方で寿命が延び、徐々に食べられる量や水分が減少し、脱水や低栄養で老衰と同じ状態に陥ることがあり、これも老衰と捉えられ、患者さんがどちらの状況か見極める必要があります。そしてどちらの老衰を望むか、ご本人にたずねます。すると大抵は『話すことができて臓器も大丈夫なら、栄養をとりたい』と言います。そのためには経管栄養を併用することもあります。どのような状態であってもご本人の希望が一番重要、キーパーソンは患者さん自身なのです」と馬木院長。

吉野氏も、「介護負担ばかりを考えるのではなく、生きる力を引き出すこと、そのために生きているのが気持ちいいということ、家族に大切にされているということを実感してもらうことを大切にしています」と続ける。

ステーションは徳島県で唯一の機能強化型1、スタッフは総勢30人を超える。

「患者をしっかりマネジメントできているのは、看護師が現場でアセスメントをして、すべてそこで判断して処置をしてくれるからです。先ほどの褥瘡をつくらないケア（基本は栄養と皮膚の保清）も含めて、看護師の技術を上げていくことで、介護保険・医療保険の範囲内でのケアは提供可能です。私が急にかけつけたり、処置で診療時間が長引くことも少なくなっています」。

自己資金ゼロからの出発 アドバイスで経営が楽に

経営面のサポートへの期待について尋ねると、「歴代のコンサルタントの方も含めて、いろいろなアドバイスを数字に置き換えてわかりやすくいただいています。制度に関する情報もいただいていて、診療所の経営上プラスになっています。人工呼吸器装着患者が利用できるデイサービスも県内初の開設で、医業経営コンサルタントも一緒に行ってくれたから進んだのだと思います。福利厚生面でも、スタッフがコロナに関する制度を使ってきちんと補助を受けられるようにつないでくれて、非常に助かりました。

理事長・院長　馬木　良文 氏

1991年徳島大学医学部卒業、同大学医学部附属病院第一内科（当時）に入局、1992年～四国中央病院など関連病院にて研修、2000～2010年国立療養所徳島病院（現・国立病院徳島病院）神経内科勤務を経て、2010年5月あおぞら内科開院。2023年4月、在宅医療という専門性を高めた診療所として法人・診療所名を改称した。
日本内科学会認定医、日本神経学会専門医・指導医、日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士、日本在宅医療連合学会専門医・指導医など。

訪問診療と訪問看護の二本柱の体制で、午前は地域住民のかかりつけ医として一般診療を、午後に訪問診療を提供することができている

そもそも当院は自己資金ゼロで始めたのです。ですから、銀行に対して非常に弱くて、利率も高かったのです。でも、アドバイスをもらって経営がすごく楽になりました」とのこと。

「建物の増設や、やりたいことはたくさんあります。『生きていてよかった』『ここなら生きていける』と思えるものをどんどん作りたいですね」と話す。コンサルタントの出番もまだまだ続きそうだ。